

## 70 天理大学附属天理参考館

—世界の珍しいものが集められています—

奈緒さんこんにちは。あなたの鏡についての質問にお答えしたのは去年9月、そのとき鏡がどのように作られるかを説明し、黒塚古墳展示館を紹介しました。



さて、今日は、同じ天理市内にある天理大学附属天理参考館のお話です。今年の新春展は「古代日本の鏡」だと聞いて行ってきました。たくさんの鏡が時代順に並べられ、いっしょに出土したものも展示されていました。この展示では、いろいろな場所、いろいろな時代の鏡が一堂に集められていて、弥生時代に始まる日本の鏡の歴史を勉強することができます。

最初の頃の鏡は、朝鮮半島や中国からもたらされた青銅製のものです。その後も古墳の副葬品や寺社への奉納品として大切に扱われています。江戸時代になると、金属製であることは同じなのですが、装飾が違いますし、お母さんたちが使っておられる手鏡のように柄がついていて実用的なものになってきたように思われます。

歴史が苦手なおじさんですが、「この時代には、こんな鏡が使われていたのか」、「この時代には、自分の姿を見るというよりは祭りごとに使われたのだ」などと勉強することができました。

ほかに常設展として様々な展示があります。おじさんが興味を持ったのは1階の「世界の生活文化」の中の「水辺に生きるーアジアの海・河川ー」です。ここにはこの地域で使われていた舟がありました。写真は台湾の帆かけ筏(いかだ)・テッパ



イです。8本の竹を束ねた船体の長さは5m、高さは7mもあります。遠浅の海で接岸できず沖合に停泊している船と波止場の間を、乗客や荷物を運んでいたそうです。今は、竹の代わりに塩化ビニルのパイプを組み、帆の代わりにエンジンで動くものが使われているということでした。

また、ヒツジの首と足を取り皮をはがして大きな袋にし、尾のところから空気を吹き込んで膨らませたもの9つを並べて作った舟がありました。黄河上流でチベット族の人たちが使っていたチュチャワです。



「所変われば品変わる」といいますが、身の周りから浮きやすいものを見つけ、工夫して生活を向上させてきた人類の歴史がありました。奈緒さんにお勧めの博物館です。

(平成25年3月・中3の奈緒さん宛て)

## スポットの案内

天理参考館は天理市守目堂町250、JR・近鉄天理駅から徒歩30分、入館料は小・中学生200円。毎週火曜日は休館日ですが、天理教の行

事があって帰参者の多いときは開館されています。また、4月28日の創立記念日、年末年始（12月27日～1月4日）と夏期（8月13日～17日）は休館です。

## 理科のワンポイント「水に浮くもの、沈むもの」

軽い物は浮き、重い物は沈みます。この場合の重さは全体の質量ではなく、同じ体積にした場合の重さを比較して言っています。

それが「密度」です。1 cm<sup>3</sup>あたりの質量で表します。質量が 324g、体積が 120 cm<sup>3</sup>の石の密度は  $324\text{g} \div 120\text{ cm}^3$  で 2.7、ついでに単位も計算すると  $\text{g} \div \text{cm}^3 = \text{g}/\text{cm}^3$  ですから、2.7g/cm<sup>3</sup> となります。

水の密度は 1 g/cm<sup>3</sup> です。これは 4℃のときの値で、これより温度が高くても低くても小さくなります。でも、1 g/cm<sup>3</sup> に近い値ですからさきほどの石は水の 2.7 倍の重さだといえます。こういう考え方で表したのが比重です。計算は  $2.7\text{g}/\text{cm}^3 \div 1\text{ g}/\text{cm}^3 = 2.7$ 、単位はありません。単位も計算すると  $\text{g}/\text{cm}^3 \div \text{g}/\text{cm}^3$ 、単位は消えてなくなります。

水より密度が大きい、比重が 1 より大きい物は沈み、密度が水より小さい、あるいは比重が 1 未満だと浮くのです。